



全会一致で採択された

## 大会宣言(案)

私たち輸送サービス労組三多摩支部は結成から3年。“全ての仲間と共に”を合言葉に、「JR東日本健全化のたたかい」を職場からつくり出し、輸送サービス労組運動の正当性を証明してきた。本日、八王子労政会館・第1会議室で第4回定期大会を開催し、更なる組織強化・拡大を目指す向こう1年の方針を全体で確認した。

国鉄の民営化＝JR発足から35年。国鉄改革の理念である「鉄道の復権」「二度と雇用不安を起こさせない」が、いま大きく揺らいでいる。

JR東日本社は、新型コロナウイルス感染症による行動様式の変化を、むしろ追い風にして「変革2027」を加速させている。複数駅での駅業務と企画業務をひとりの(多くの)社員が担うことで支社機能が省略できる営業統括センター化は、すでに本業の鉄道サービスにおける労働密度を上げている。コストダウンを理由とした出札窓口の廃止、駅構内の時計や時刻表の撤去、運転本数や編成両数の削減、ワゴン運転化等では、現場社員だけでなく利用者にも大きな負担・不便を強いており、安全とサービスレベルは著しく低下している。新たなジョブローテーションでは、「キャリアプラン」「活躍フィールドの拡大」と言いながら、家庭環境を考慮しない本人希望無視の転勤で社員が駒のように扱われている。「仕事と家庭の両立ができない」「未来が描けない」と言い退職する社員が相次いでいる。現場の苦悩を経営に反映させなければならない。これまで日々積み重ねてきた接客や取扱いが減少し、鉄道の“素人化”が進んでいる。経験に裏打ちされた知識・技能・指導で維持してきた鉄道輸送サービスの“質の低下”に歯止めをかけなければならない。利用者が戻り、暴力行為も増加、社員の命が脅かされているからだ。

一方、週刊文春が報じた記事は会社の信用を大きく失墜させた。社長会見での反省の色を微塵も感じない陳謝は現場に不信感を招いた。副社長の報酬カットで幕引きを図ることは、現場社員の日々の努力を足蹴にするものであり許されない。組合の指摘を受け止めず、社員にも何一つ説明しない。深澤社長は昨年12月の“社員の皆さんへ”で「新しい会社を創ろう!」と鼻息荒く結んだが、現場・社員に全てを押し付ける経営＝上意下達を、当の社員に呼び掛けた。社員をバカにするこのような経営陣に自浄作用など望めない。それは“座して死を待つ”ことだ。

政治への取り組みも欠かせない。過日の参議院議員通常選挙では「青木 愛」氏を再び国政に送ることができた。国土交通省審議官に「今のJR東日本は福知山線事故前夜」という職場の声を届けた実践、利用者の声も含め、さらに広範な連帯で職場現実を国政にも訴えていく。

「JR八王子駅パンフ配布処分事件」も正念場を迎える。私たちは決してあったことをなかったことにはしない。JR東日本グループ各社の不健全経営を正すため、「脱退パワハラ訴訟」や「JRバス関東不当労働行為事件」の先頭に立ってたたかう仲間と共に必ず勝利を掴む。

八地申第24号(障がい者への合理的配慮を欠いた差別・ハラスメントの是正を求める緊急申し入れ)等、会社の不誠実交渉を訴えた都労委への「あっせん」は却下されたが、それは同時に2度も中断した交渉の再開を意味する。立川駅長の不当労働行為を訴えた八地申第29号も含め、パワハラや不当労働行為等の企業犯罪を一現場長の問題に切り縮めることなく、経営の意志の現れた事象＝組織事故として、全集中で取り組むこととする。

私たちは、エッセンシャルワーカーとしての「労働の価値」について自ら深めなければならない。その正当な評価と還元を求め、「定期昇給の完全実施」を実現させた。夏季手当交渉では3点の確認事項を労使の共通認識に高めた。輸送サービス労働に相応しい賃金・手当は誰も与えてくれない。自ら掴むしかないのだ。

「働きがい」「生きがい」「心の豊かさ」が実感できるJR東日本を取り戻すために、輸送サービス労組・全組合員が力を合わせ、粘り強く、全ての仲間と共に未来を展望しよう!

以上、宣言する。

2022年7月30日  
JR東日本輸送サービス労働組合  
八王子地方本部三多摩支部  
第4回定期大会

# 大会宣言はこれだ!

## 全ての仲間と共に真に「心の豊かさ」を

輸送サービス労組

## 感じられる職場を私たちの手でつくりあげるぞ!